

## 清泰寺にみる歴史的風致（美濃市歴史的風致維持向上計画より）

小倉山西方の高台、古木に囲まれ「うだつの上がる町並み」から隔絶した世界をつくり、400年間うだつの上がる町並みを見守る金森家菩提寺である清泰寺が、今もひっそりと佇んでいる。

清泰寺は臨済宗本山妙心寺の直末寺、妙心寺派の寺班特例地とされている。慶長10年（1605）金森長近は前領主佐藤秀方の菩提寺であった以安寺を移築し、妙心寺派僧鉄松和尚を開山として、「安住山清泰寺」と改称し、金森家菩提寺とした。清泰寺前には当時総門があったとされるが、今はない。



うだつの上がる町並みから隔絶した清泰寺



清泰寺三門



清泰寺周辺位置



寛政4年（1792）武儀郡上有知村絵圖に描かれる、清泰寺、八幡神社及び尾張藩上有知代官所

参道を進むと、正面には小倉山城跡と同じ野面積みと呼ばれる石垣が残り、当時は城郭の一部であったことがわかる。参道の北側は、かつては、明治5年（1872）の学制の制定により申英義校が置かれ、上有知の教育の中核となった場所である。

参道から三門を通ると、築地塀に囲まれた寺内に入る。正面には禅宗建築独特の庫裏が威風堂々と建ち、見る者を圧倒する。天保年間（1830 - 1844）の改築とされ（『清泰寺由緒書』）、大妻を正面に向け唐草くずしと波の彫刻をもつ妻飾りが優美さを増している。



優美な妻飾りを掲げる清泰寺庫裏



城下町時代の野面積みの石垣が残る築地塀



天保年間に改築された壮麗な建築様式をもつ清泰寺庫裏



金森家、佐藤家の位牌を祀る清泰寺本堂

本堂は、明和4年(1767)の再建とされ、桁行7間、梁間13間の入母屋造で、奥に開山堂を付す大規模な本格的禅宗建築である。堂内には、保寧寺殿(佐藤清信)、以安寺殿(佐藤秀方)、岩佐院殿(佐藤方政)、清泰寺殿(金森長近)、繡雲殿(金森長光)、久昌院殿(長光母)の佐藤家、金森家の各位牌が祀られている。また、本堂裏には佐藤清信、秀方の墓、金森長光(長近の二男)の墓があり、文政4年(1821)には佐藤一斎が先祖を偲びこの墓に詣でている。長光の墓は、もとは三門を入った左手奥の長近の霊を祀る金森大権現社に祀られていたもので、明治の神仏分離で墓地へと移された。金森大権現社は江戸時代には拝殿、本殿の規模も大きく参道も南面にあり、参拝者も多かった。かつて3月12日には祭礼があり、安政4年(1857)には小倉山城主当巳二百五十年祭が行われ盛大な供養がされるなど、長近は上有知の人々に崇敬されていた。

本堂裏手には、金森宗和作と伝えられる書院庭園(市指定文化財)があり、寺内を取り囲む古木とともに幻想的空間へと導いている。

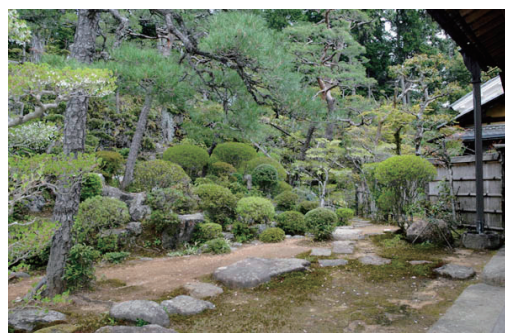
清泰寺では毎年正月元旦から3日には修正会、1月、5月、9月の各15日には善月祈祷大般若会、昭和34年(1959)からは同日に壇信徒の女性のみで組織された「和敬会」の会合が執り行われ、当



本堂に祀られる清泰寺殿、保寧寺殿、以安寺殿の位牌



三門を入り南脇に建つ金森大権現社



金森宗和の作庭と伝えられる書院庭園。山の斜面をとり入れた庭の一角には、貴人榻といわれる石が置かれる。

日のおとし（精進料理）の支度も和敬会により行われている。清泰寺境内には、創建以来お茶の木が栽培され、毎年、和敬会により茶摘みがされ、ほうじ茶として振る舞われている。かつては「上有知餅」といわれるあんこ餅も作られ、檀家の人々に振る舞われた。

歳晚諷経、除夜の鐘では、第六世密巖和尚の時代に再建された鐘楼が、今も梵鐘の音を城下のうだつの上がる町並みに響き渡らせている。

正月元旦からの修正会は午前10時から法要が始まり、新年祝い、天下泰平等を祈祷して、大般若経の転読が行われる。修正会厳修の祝祷の大般若のお札は各檀家に配られ、玄関の軒先下に掲げられている。金森長近の城下町時代（1606－1611）には領内五千戸を檀家として扱い、各戸に大般若のお札が配布されていた（高林、1958）。今も、檀家の家の軒先には、大般若祈祷札が掲げられている。

江戸時代には、正月に、城下町の年頭廻りが行われていた。住職は駕籠に乗り全山僧侶を従えて、若党2名が先頭の露払いに立ち、「清泰寺、年頭」と大声で呼び、各町内を練り歩いた。その駕籠は現在本堂の天井に吊るされている。また、明治時代に入



400年間、うだつの上がる町並みに梵鐘の音を伝える清泰寺鐘楼



毎年1月に配られる大般若祈祷札は、檀家の家の軒先に掲げられる。



善月祈祷大般若会



明治30年代、上有知の町から郡上街道を通り、  
曾代地区へ向かう清泰寺の年頭参り

ると住職は人力車にのり、上有知の町から打上坂（有知上坂）を上り曾代へと向かった。上有知の人々は共に練り歩き新年を祝った。

牧谷の蕨生地区の総代は毎年1月10日、清泰寺へ年頭挨拶に訪れ、本堂にて金森長近への年頭のお参りを行う。長近は紙漉き職人を保護育成し、美濃紙は幕府御用紙や各藩の御用紙となったため、紙漉き職人は金森長近への恩を忘れなかった。かつては、旧暦1月10日に上有知にて紙の初市が開かれた。牧谷の紙漉き職人は紙を持参し、玄関にて年頭の挨拶を行った。板の間に上がり和尚から年頭を受け、その後、本堂に進み長近公の霊前に美濃紙をお供えし、感謝を捧げた。そして庫裏の茶の間に移りおとぎを頂いた（高林、1958）。この風習は昭和30年代後半まで続けられ、庫裏の玄関前には、大正9年（1920）に紙漉き職人により捧げられた煮熟釜や楮を水晒しする水槽が置かれ、往時の風習の面影を偲んでいる。

金森家菩提寺である清泰寺は、うだつの上がる町並みの繁栄と牧谷の紙漉き職人の繁栄を願った。多くの檀家により活動は支えられ、城下町時代の風習は今も続けられ、檀家の家屋の軒先には清泰寺のお札が掲げられる。また、牧谷の紙漉き職人も400年間金森長近への恩を忘れず、毎年長近へ感謝を捧げている。牧谷と上有知、職人と商人、各々の立場は違うが、ともに美濃紙の繁栄と安泰を願った。清泰寺では今も風情ある佇まいを残し、牧谷の人々、上有知の人々を見守っている。



本堂の天井には、江戸時代年頭参りに使われた駕籠が保管されている。



大正時代に紙漉き職人により寄贈された楮を煮る煮熟釜が、庫裏の玄関前に置かれている。